

アンデルセン童話とグリム童話

最初にやさしい質問から始めてみましょう。次の10の童話の作者（出典）は誰（何）でしょうか？

赤ずきん 狼と七匹の子ヤギ ブレーメンの音楽隊 白雪姫 人魚姫 裸の王様
醜いアヒルの子 マッチ売りの少女 アラジンと魔法のランプ アリとキリギリス

誰でもが聞いたことのある作品です。でも、正確に当てるのは意外に難しい。正解が8割以上だとしたら、その人はきっと幼稚園の先生や保育園の保育さんで、一般の読者だったらよほど童話に深い関心を寄せている人でしょう。

正解は、最初の4つがグリム童話、次の4つがアンデルセン童話、そして「アラジンと魔法のランプ」は千一夜物語、「アリとキリギリス」はイソップ童話からなのですね。

私は昨年6月、シエクスピア、ゲーテ、ヘッセなどの作品の舞台の取材でデンマークとドイツを訪問しました。せっかくの機会だったので、そのとき、アンデルセンとグリム兄弟の生家や博物館も訪ね現地の「童話の今」を探ってきました。

アンデルセン童話は、デンマークの小説家アンデルセンが、子供の心を豊かに育むために、初めから純粋な童話として書いたものです。情操教育に優れ、美しく、甘く切ない物語が多いですよ。

6月3日、首都コペンハーゲンから特急に乗り訪れたオーデンセ市。駅から歩いて10分ほどのところにあるアンデルセン博物館を訪ねました。入場料が60クローネ（約1000円）とあります。受付で「東京からアンデルセンの取材に来ました」と言うと、驚いたことに「じゃあ、入場料は結構ですよ」と言われたのです。なんとありがたい配慮！

“じゃあ、帰国したらアンデルセンのことをしっかりPRしなくちゃいけないな！”なんて、軽い冗談を自分に言い聞かせながら“取材”にあたりました。

館内はフラッシュなしの撮影が許可されています。見学中に2組の小学生グループと1組の高校生グループに会いました。世界で最も多くの言語に翻訳されているというアンデルセンの作品です。館内の図書館には各国語の翻訳書があり、その一角には、日本で出版された多くの本や絵本が一つの本棚にまとめて並んでいました。

オーデンセに生まれたアンデルセンは1835年に『即興詩人』を発表、日本でも「原作以上の翻訳」と評された森鷗外の名訳で広く愛読されてきました。その後、『人魚姫』で童話作家として不動の地位を築いていきます。小説、戯曲、旅行記等の多くの作品も発表していますが、死ぬまで書き続けた150以上の童話によって、ついにアンデルセンは「童話の父」となったのです。館内にはそんな多彩な遺品や写真が展示されていました。

博物館の前には静かに池が広がり、緑の芝生の上では見学を終わった高校生たちが遊び戯れ

ています。私が建物の概観や池の撮影にカメラを向けていると、突然、一人の女子高校生が声をかけてきました。

「私たちの写真を撮って！」

可愛らしい金髪の少女の呼びかけです。

「こちらは日本からのカメラマン。写真はもしかしたら日本のどこかの雑誌に載るかもしれませんよ」と冗談交じりにOKすると、彼女は仲間全員と賑やかにポーズをとったのです。ピチピチとなんともくったくの未来に満ちた美少女たちでした。

博物館から5分も歩くとアンデルセンの生家がありました。まわりのビルで埋まってしまい、そんな小さな黄色に塗られた家。車道に面したドアに「入り口」と書いてあり、釘がカギの代用になっています。ドアをロックして入ると、小さな展示室の奥にまた小さな受付。ここで入場料の25クローネ（約400円）を払い「博物館はずいぶん混んでいましたが、こちらは誰もいないですね」と私が言うと、もう60歳を超えているであろう受付の婦人は「あなたが今日の最初のビジターです。ようこそいらっしゃいました。ゆっくりとご案内しましょう」と部屋の説明を始めました。

——アンデルセンは2歳から14歳までここで育ちました。父親は貧しい靴職人でした。高い棚の上に古い本が3冊。「当時は、靴職人なんて絶対に本なんか読むことはありませんでした。でも父親は読んでいました。アンデルセンにはその父親の感化が多分にあるのです……」

話をしているところに20人ほどのグループが到着、がぜん彼女は忙しくなりました。私は室内や屋外の写真撮影に専念。室内は「よくぞこんな小さな部屋に大勢の家族が……」と思うほどの狭さですが、裏庭は比較的広い。大事なことは経済の豊かさや家の広さではない。子供たちにどういう志を与え、生きる力を植え込むかが大切なのでしょう。

グリム童話は、兄ヤーコブ、弟ヴィルヘルムのグリム兄弟がドイツの民話約250編を収めた童話集です。少し前、日本では「本当は怖いグリム童話」といった論調や風評が広まったこともありましたが、元々はゲルマン民族の民話です。原本には近親相姦、人肉食いなど残酷な場面も散見されますが、童話は子供たち向きには書き換えられているからです。兄弟は「ドイツ語辞典」の編者としても歴史に名を残しています。

6月7日、私は宿泊地のフランクフルトから兄弟の生まれ育ったハウナウを訪ねました。町の中心部の広場には兄弟の像が空高く屹立しています。台座を含めれば6メートルほどの高さになるでしょう。撮影を始めたところに2組の小学生のグループがやってきました。子供たちは像の台座に登って遊び始めた。教師の説明にも注意が散漫のようです。一通りの撮影を終えたところで、私は引率の先生に声をかけてみました。

田舎町です。バスの運転手も私が道を尋ねた街の婦人も母国語のドイツ語しか通じませんでした。でも30代と思われる若い女性の先生は、さすがに流暢な英語で対応してくれました。

「きょうは3年生の社会見学です。自分たちの生まれた町にどんな偉人がいたか訪ねまわっているんですよ」

「グリム童話は日本でも人気があり、赤ずきんとか白雪姫の話などは誰でも知っています。こちらの子供たちはどうなのでしょう？」

「小学校に入るまでは家庭で読み聞かせることが多いのですが、学校では別の勉強が始まってあまり触れません。もしかしたら、日本の皆さんの方がよく読まれているかもしれませんね」

.....

話を聞く私の手はカメラを抱えたまま。「せっかくなので記念写真をどうですか？」と促すと、先生はそれをドイツ語で子供たちに伝えました。するとワッと台座の周りに飛び乗った彼らはすぐにポーズを作ったのです。こちらもくったくがありません。

撮り終わって「ありがとう、じゃあね」と去りかけると、子供たちは先生が急いで教えた英語で「バイ、バイ」と手を振って見送ってくれたのです。童話の世界そのものでした。

再び列車に乗り私は兄弟の博物館があるカッセルに向かいました。メルヘン街道の中心に位置し、旅の拠点となる街です。駅からタクシーを拾い博物館についてみると、なんと「閉館中」の表示。「改装のためしばらくは別の場所で開いています」と地図が掲示されていました。

臨時の会場はカッセルにもう一つある駅の建物内にありました。兄弟の直筆の原稿やイラスト、各国語による翻訳本の展示もありましたが、やはり臨時の会場であるがゆえか展示品の数は残念ながら期待したほどにはありません。改装中の博物館は4階建ての大きな建物。改装後のより充実した展示に期待するしかないのでしょうか。

ところで、デンマーク、ドイツ訪問にあたって私はそれぞれ、いくつかの童話を読み直してみました。動物が主人公で多く出てくるのも面白い。子供たちのお友だちなのですね。幼稚園のころ紙芝居でよく見た絵柄もありました。当時の絵はもっと単純なものでしたが、それでも豊かな想像力をかきたててくれたものでした。

お城では舞踏会が開かれ、悪い魔法使いの呪いは王子様とお姫様のキスで解け、意地悪な継母は裁きを受けて罰せられる。童話は子供たちに夢を贈り、一面で勸善懲悪に通ずる心も育んでいます。筆者自身の幼少期を思い出しても、ずいぶん童話に育まれてきたような気がします。童話を大切に作る大人社会こそが、また20年、50年後の心豊かな人間の社会を築いていく要因となっていくことを深く思ったものでした。